

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第四号
平成三十年三月一日発行（抜刷）

論文

桜町天皇の大嘗祭

―『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』の考証―

佐野真人

桜町天皇の大嘗祭

―『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』の考証―

佐 野 真 人

□ 要 旨

皇學館大学研究開発推進センター神道研究所では「皇室祭祀の研究」と「神宮祭祀の研究」とを総合研究に掲げ、創設された昭和四十八年（一九七三）以来の重要課題として、特に「大嘗祭の研究」を推進してきた。平成二十九年度の初めに、元文度の大嘗祭に関する史料であり、桜町天皇大嘗祭の調度品の略図と考えられる『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』を古書肆より購入し、神道研究所の所蔵とすることができた。本稿では、新収蔵資料である『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』について、その史料価値を考えたい。

□ キーワード

桜町天皇 大嘗祭（大嘗会） 調度品 朝儀の復興

はじめに

皇學館大学研究開発推進センター神道研究所では「皇室祭祀の研究」と「神宮祭祀の研究」とを総合研究に掲げ、創設された昭和四十八年（一九七三）以来の重要課題として、特に「大嘗祭の研究」を推進してきた。その成果は、平成二十四年（二〇二二）に皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』（思文閣出版、平成二十四年六月）の刊行によって結実した。しかし、大嘗祭を中心とする「皇室祭祀の研究」は、依然として神道研究所の重要な課題として位置づけられ、今日でも研究が進められている。

さて、平成二十九年度の初めに『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』を古書肆より購入し、神道研究所の所蔵とすることができた。その史料名から明らかのように、元文度の大嘗祭に関する史料であり、桜町天皇大嘗祭の調度品の略図と考えられる。

近年、再び大嘗祭への関心が高まりつつある状況の中で本史料の紹介及び考証は、重要な意味を持ち、大嘗祭に関する研究の推進に寄与することになるう。

本稿では、諸記録との共通点及び相違点を比較することで、新収蔵資料である『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』について、その史料的价值を考えた。

一、桜町天皇と大嘗祭

桜町天皇は御諱を照仁^{ていひと}、御称号を若宮といい、中御門天皇の第一皇子として享保五年（一七二〇）正月一日に降誕された。母は近衛家熙^{このえいせいのり}の女・贈太皇太后尚子^{しょうし}（新中和門院）である。同年十月十七日に儲君に治定され、十一月四日に親王宣下、同十三年（一七二八）六月十一日に立太子、同十八年（一七三三）二月一日に十四歳で元服する。この時の加冠役は太政大臣の近衛家久^{このえいひさひさ}、理髪役は春宮大夫の徳大寺実憲^{とくだいじじしむのり}がつとめている。享保二十年（一七三五）三月二十一日に父帝の中御門天皇の譲位を受けて踐祚、十一月三日に即位式を行った。このとき十六歳である。そして、元文三年（一七三八）十一月十九日に大嘗祭が斎行された。その後は、延享四年（一七四七）五月二日に桜町殿に行幸し、その同日に皇太子の遐仁親王^{とろのう}（桃園天皇）に譲位している。同月七日には太上天皇の尊号を受けた。寛延三年（一七五〇）四月二十三日に宝算三十一歳で崩御し、五月十八日に泉涌寺に斂葬された。^①

大嘗祭とは、即位した天皇が親祭される一代一度の国家祭祀であり、その最も古い文献は平安時代前期（貞観期）に編纂された勅撰儀式書とされる『儀式』である。しかし、戦国時代の動乱の影響から文正元年（一四六六）の後土御門天皇大嘗祭を最後に中絶した。二二年後の貞享四年（一六八七）の東山天皇の御代に大嘗祭で再興されたが、次の中御門天皇は大嘗祭を斎行せず、その次の桜町天皇の元文三年（一七三八）に再々興された。大嘗祭の再興に関しては、八束清貫氏^②、武部俊夫氏^③、三木正太郎氏^④、茂木貞純氏^⑤の論考に詳しい。特に桜町天皇大嘗

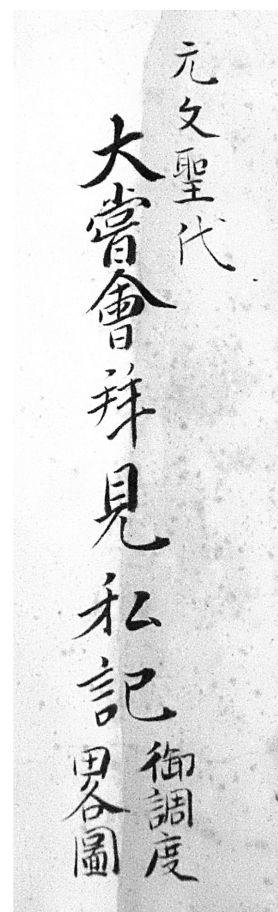
祭を個別に取り上げたものとしては、武部敏夫氏の「元文度大嘗会の再興について」^⑥、福井款彦氏の「丹波国山国元文三年「大嘗会木寄帳」について」^⑦が挙げられる。大嘗祭の復興については先学の成果に従いたい。

桜町天皇の大嘗祭の記録として、『大嘗会次第（元文三年）』（『歴代残闕日記』第二十九巻所収）が挙げられる。この記録に基づいて日時などを確認すると、元文三年（一七三八）八月二十八日に悠紀・主基の国郡の卜定が行われ、悠紀の国郡は近江国滋賀郡、主基の国郡は丹波国桑田郡とされた。^⑧九月晦日に荒見川祓、十月二十九日には大嘗祭前の御禊が行われた。この御禊は、古儀の大嘗祭では天皇が賀茂川に行幸し、その河原で御禊が行われていたが、この時には行幸が無く清涼殿において御禊が行われている。^⑨十一月三日には大嘗会由奉幣の勅使が発遣され、同十九日には大嘗会卯日の神事が斎行された。その後、二十日に悠紀節会、二十一日に主基節会、二十二日に御神楽、二十三日には豊明節会が催され、大嘗祭の諸行事が終了している。

この他に元文三年（一七三八）大嘗祭の次第などの記録・注釈は、荷田在満の『大嘗会便蒙』・『大嘗会儀式具釈』に詳しく、次節ではこれらの記述と比較を行いながら、『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』について考証を加えたい。

二、『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』の考証

本史料『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』は、卷子装で縦三十・五糎、横四四・八・三糎で十一紙ある。外題はなく、首題に「元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図」とあり、元文三年（一七三八）十一月に斎行された桜町天皇の大嘗祭の調度品図で、墨書のほかに朱による注記がある。奥書はなく、作成年代及び作者は不明である。



内容の構成は、「荒見川ノ祓」・「由奉幣。或云、神祇官三社奉幣」・「大嘗会御当日御庭上并御調度ノコト。大格并見図形」・「悠紀・主基両御殿御調度」・「後ノ御節会ノ御調度」があり、最後に「御蓋」が描かれている。以下に写真を示しながら、『大嘗会并見私記』の記載内容について考察を加えたい。

(1) 「荒見川ノ祓」

荒見川祓は、大嘗祭の悠紀・主基国郡卜定及び行事官が定められた後に、北野斎場が設けられ、大嘗祭の準備に着手するのに先立ち、斎場近くの紙屋川の辺で九月晦日に行われる。この祓は大嘗祭の散斎期間に入る前に、関係する諸職の穢を祓うもので、荒見は「あらいみ（散斎）」の意と解される¹⁰。

元文三年（一七三八）九月三十日に斎行された桜町天皇大嘗祭の荒見川祓は、『植房卿記』（万里小路植房の日記）に詳細である。万里小路植房は元文三年（一七三八）は権中納言で大嘗会検校を務めており、その立場から詳細な記録を残したと考えられる。

『植房卿記』元文三年（一七三八）九月三十日条（『桜町天皇実録』所収）

元文三年九月卅日己卯。曇。午刻以後雨降。今日就「荒見川」祓。於「北野紙屋川高橋之北河原」被行「其儀」。悠紀・悠紀行事并以下参行。先平野社各参集。以後両方并以下紙屋川参向。于「辰刻」過。今朝早天紙屋川設「幄」以下。

桜町天皇の大嘗祭（佐野）

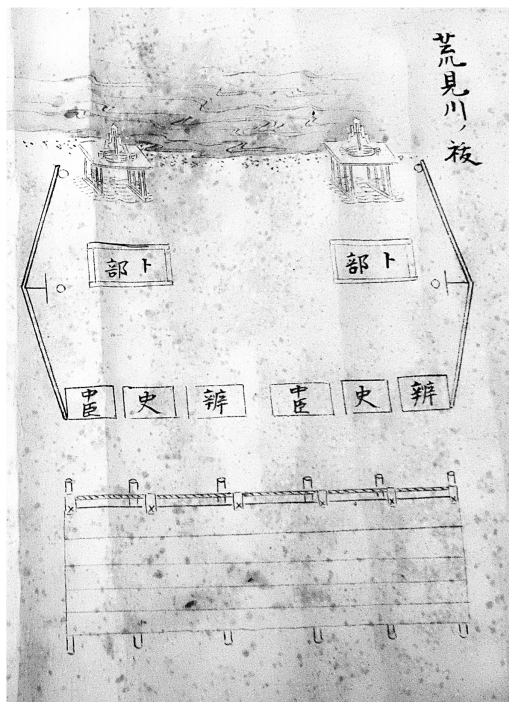
其儀。河頭東岸立幄一字。（木工寮。大石弘充調進。）其東引「大幔」。（大蔵省。大石弘充調進。）迫岸西頭立「八足案二脚」。（悠紀・主基。木工寮調進。）其上置「祭物」。（各一裹。以「薦裹之。」）挿「件祭物上大麻」。（各行事。紀春清調進。）其前敷「軾二枚」為「二卜部座」。（主基同之。）其東設「薦黃端半帖」為「悠紀主基并・史・中臣等座」。（件座。各掃部寮助利原利音調進。）剋眼。權右中弁頼要（悠紀。）左少弁清胤（主基。）右大史景春（悠紀。）右大史盛行（主基。共五位以上史也。）等着座。（北上西面。悠紀方路自「北方」参進。主基方路從「南方」参進。両方同時参進。各着後。）悠紀稻実卜部種重。（從五位上。号「鈴鹿佐渡守。」）主基禰宜卜部雄賢（從五位下。神祇權大祐。号「鈴鹿筑前守。」）等参進着軾。（兩人共路如「両弁」。尤此兩人卜部吉田社祝。本雖為「中臣」。今度就「大嘗会」吉田社祝輩悉為「卜部」。此度役相從。）中臣益親朝臣（正五位下神祇少祐。平野社司。号「鈴鹿左京大夫。」）中臣光知（正五位下神祇權少祐春日社氏人。号「富田内蔵権頭。」）等参進立「幄屋外」。（悠紀北方。主基南方。）両方神部（賀茂社刀祢用代。）持「贖物」。（行事官調進。）授「於中臣」。両中臣取之居「両弁前」退。神祇官史生代左官掌内蔵大允小野氏真持「贖物」参進。居「悠紀史」前退。鑑取一人（賀茂社神人用代。）持「贖物」居「主基史前」退。（是史生依「一人」也。）両方卜部取「大麻」授「中臣」。両方中臣参進取之進「両弁前」。両弁乍令持「大麻於中臣」。取「大麻」末一撫一吻畢。両方中臣退。授「大麻於神部」。両方神部持「参両方史前」。両方史一撫一吻畢。其儀如「弁」。両方神部退返「中臣」。両方中臣返「大麻於卜部」着座。両方卜部立「大麻於軾前」。取「出祝詞書付」読之。畢又取「大麻」修祓。其間両方并以下解「繩取」人形。撫「身散」々米三度。両方卜部祓畢退入。両方中臣起座進「両方弁前」撤「贖物」退。両方鑑取両方史前撤「贖物」退。両方并以下起座（下薦為「先。」）于「時巳」刻。

（一）は割書及び細字。以下同。

『植房卿記』によれば、この日の荒見川祓は紙屋川の高橋の北河原において、悠紀・主基の行事弁以下の参列のもとで行われた。あらかじめ参列者は平野社に参集した上で、辰刻過ぎに悠紀・主基の行事弁以下が紙屋川に参向した。当日の早朝には、紙屋川に幄以下の舗設が行われている。具体的には、紙屋川の東岸に幄一字を立てて、その東側に幕を引く。岸に迫る斎場の西側に八足案二脚を設置し、案上には薦で包まれた祭物を置き、祭物には大麻を挿して、その前に軾を二枚敷いて卜部座とした。卜部座の東には薦黄端半帖を設けて、悠紀と主基の弁・史・中臣らの座としている。

【写真2】は、紙屋川が上部に描かれ、その河原に斎場が舗設されていることがわかる。『植房卿記』の記述に従えば、川の東岸に斎場が設けられていることから、斎場図の方位は上が西となり下が東となる。そして、図は斎場に建てられた幄一字の内部を描いたものである。幄の下、すなわち東側には幔が引かれ、斎場の西側に八足案二脚（案上には薦に包まれ大麻を挿した祭物を置く）と卜部座、そ

【写真2】 荒見川ノ祓① 斎場図



の東に悠紀と主基の弁・史・中臣らの座が配置されており、『植房卿記』の記述する斎場の配置、また、荷田在満の『羽倉草稿大嘗会図式』の記載する「荒見川祓図」⁽¹²⁾とも一致している。

『植房卿記』は続けて、祓の次第を克明に記録している。時刻になり、悠紀行事所の弁・権右中弁葉室頼要、主基行事所の弁・左少弁烏丸清胤（後に光胤）、悠紀行事所の史・右大史村田景春、主基行事所の史・右大史山口盛行が参進して着座する。このとき悠紀方は北側から、主基方は南側から参進し着座したとある。続いて悠紀の稻実卜部・鈴鹿種重、主基の禰宜卜部・鈴鹿雄賢が参進して、八足案の前に敷かれた軾に着座する。このときも弁の参進と同じように悠紀の鈴鹿種重は北側から、主基の鈴鹿雄賢は南側から斎場に参入した。卜部となった両人は、吉田社の祝で元々は中臣とされたが、この度の大嘗会では吉田社の祝を悉く卜部として、諸役に従っていると注記されている。

稻実卜部と禰宜卜部とは、大嘗祭の次第を記載する最も古い文献である『儀式』践祚大嘗祭儀にも記述され、『延喜践祚大嘗祭式』拔穂条に、

八月上旬。申^{しん}官差^{くわんさ}二宮主一人。卜部三人^{ふべ}一^{ひと}發遣。両国各二人。其一人号^{なづ}二稻実卜部。一人号^{なづ}三禰宜。

とあるように、両斎国に各二人が発遣され、その一人は稻実の卜部、他の一人は禰宜の卜部と称された。『山槐記』元暦元年（一一八四）八月二十六日条に、

差^さ進悠紀所拔穂使^{はくすいし}一事、稻実卜部宮主^{みやぬし}從五位行権大祐^{けんたいゆう}卜部宿禰兼基。禰宜卜部從五位下卜部宿禰兼守。神部肆人。

とあり、宮主が悠紀国の稻実卜部となっている。古代の大嘗祭における稻実卜部と禰宜卜部の人員は、悠紀国が稻実卜部一人（宮主）・禰宜卜部一人（卜部）、主基国が稻実卜部一人（卜部）・禰宜卜部一人（卜部）となる。この点からすれば、このときの荒見川祓に主基方は稻実卜部ではなく、禰宜卜部が出仕していることが疑問として残ることになる。古儀の大嘗祭では稻実卜部と禰宜卜部は悠紀・

主基の両方におり、元文三年度（一七三八）のときは悠紀方を稲実卜部、主基方を禰宜卜部としていた可能性はあるものの、現段階ではこれ以上の考察は難しい。また、後掲の『兵範記』^{ひょうはんき}（仁安三年（一一六八）八月二十三日条によれば、仁安三年度大嘗祭（高倉天皇大嘗祭）の荒見川祓では、「両方祝師」として卜部兼貞と卜部（宮主）兼行がつとめており、荒見川祓においての祓主は、稲実卜部・禰宜卜部ではなく、卜部氏から選出された「祝師」がつとめていたことに注意しなければならない。また、荷田在満は『大嘗会儀式具釈』において、

其悠紀方をば稲実卜部と云ひ、主基方を禰宜卜部と云ふ。但昔は拔穂使に、悠紀にも主基にも各稲実卜部、禰宜卜部とて兩人づゝあり。貞観儀式以下に見ゆ。今荒見河祓に悠紀方を稲実、主基方を禰宜と分ち称すること拠ところ有りや知らず。

と記しており、荷田在満も悠紀方を稲実卜部、主基方を禰宜卜部と区別したことの根拠は不明としている。

卜部に続いて中臣が参進し幄の外に立つ。このときは、悠紀方は鈴鹿益親（神祇少祐・平野社司）、主基方は富田光知（神祇権少祐・春日社氏人）が奉仕している。続いて悠紀方・主基方の神部（このときは賀茂社の刀祢を代りに用いている）が贖物を持ち、それぞれの弁の前に立つ。続いて神祇官史生代・左官掌・内蔵大允の小野氏真が贖物を持って参進し、悠紀行事所の史の前に立つ。さらに鑑取一人（このときは賀茂社の神人を代りに用いている）が贖物を持って主基行事所の史の前に立つ。悠紀方・主基方の卜部は、大麻を取りそれぞれの中臣に授け、中臣は受け取ると進み出て、各行事所の弁の前に立ち、各弁は中臣に大麻を持たせたまま、大麻の末を一度撫でて、さらに息を一度吹きかける。それが終わると各中臣は退いて大麻を神部に授ける。神部二人は各行事所の史の前に立ち、各史は弁と同じく大麻を撫でて息を吹きかける。各神部が大麻をそれぞれ中臣に返し、各中臣はそれぞれ卜部に大麻を返して着座する。二人の卜部は、大麻を軾の前に立てて祝詞

の書付を取りだし奏上する。そして大麻を取り修祓する。その間に各行事所の弁以下は、縄を解き、人形をとって身体を撫でて、散米を三度散らして祓をする。祓の儀が終了すると卜部が退出し、各中臣が座を立ち、それぞれの弁の前の贖物を撤去する。神部と鑑取は各史の前の贖物を撤去し、弁以下が座を立ち（下位の者から退出）、巳時に荒見川祓は終了している。

本儀である大嘗宮の儀は、悠紀殿の儀が先に行われ、その終了後に主基殿の儀が行われる。しかし、荒見川祓は『種房卿記』の記録する次第では、悠紀行事所・主基行事所の弁以下が参列し、二人の卜部等によって同時に進行されている様子を窺い知ることができる。『儀式』¹³踐祚大嘗祭儀には、
行事以下雑色人以上、共に祓の場に就き大祓せよ〔悠紀は上に在り、主基は下に在れ。〕

とあるのみで、次第の詳細はわからないが、『兵範記』には高倉天皇大嘗祭における荒見川祓の様子が記録されている。

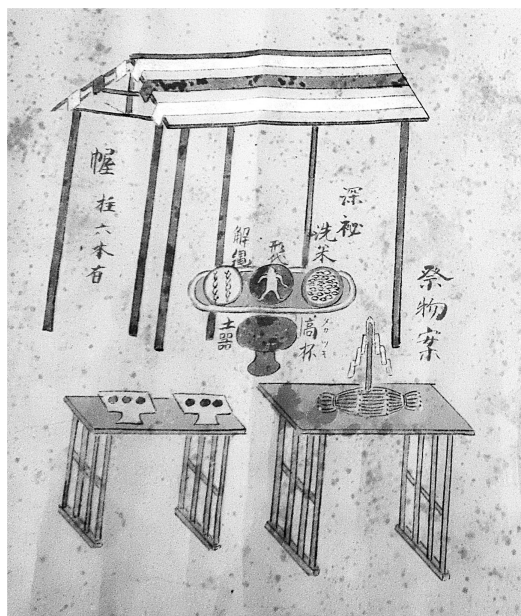
『兵範記』仁安三年（一一六八）八月二十三日条
廿三日壬子。天晴。今日可^レ行^二荒見河祓齋場所点^レ地事等^一。（中略）下官以下座定。次主基方従^レ之。次両方祝師紀伊權守卜部兼貞。皇太后宮宮主兼行。自^二北・南^一進出。著^二前庭座^一。次祐大中臣為定居^二下官贖物^一。同祐同能隆居^二主基弁贖物^一。史生以下居^二寄人以下贖物^一。次史生取^二兼貞之所持之大麻^一伝為定。為定捧来^二下官前^一。下官取^二大麻^一撫^レ之。為定返^二史生^一。史生次第引^レ之。主基方同^レ之。兼貞捧^二大麻^一発^レ声読^二祭文^一。（先祭文。次中臣祓。）下官以下解^レ縄撫^二人形^一。祓畢撤^二贖物^一。次両方起座。（後略）

『兵範記』の記載は、主基方の所作について省略が見られるが、祝師二人がともに参進することや、悠紀行事所（下官）と主基行事所の弁の前に贖物も持って立つこと、祓が終わって両行事所が共に起座することから、仁安三年（一一六八）の段階においても、荒見川祓は悠紀方と主基方の両方が同時に祓を行っていたこ

とが確認され、『儀式』や『延喜式』の時代も大きな齟齬ないと考えられる。荒見川祓では「祭文」に引き続いて「中臣祓」が読まれていることが確認される。しかし、元文三年度(一七三八)の荒見川祓では、祝詞の奏上後に縄を解いて、人形をとり身体を撫でて、散米を三度散らして祓をしたときに、中臣祓が読まれていたことの断定は難しい⁽¹⁴⁾。

【写真3】は、荒見川祓の時に用いられる祭物や贖物の図である。『植房卿記』に「迫岸西頭立三八足案二脚」(悠紀・主基。木工寮調進。)其上置祭物。(各一裹。以薦裹之。)挿二件祭物上大麻」と記載されている薦に包まれ大麻を挿して八足案に置かれた祭物の様子が詳細に描かれている。

【写真3 荒見川ノ祓② 祭物図】



贖物の「洗米・形代・解繩」とともに使用する土器・高槻も用意されていたことが確認でき、『植房卿記』の「両方并以下解繩取三人形。撫身散々米三度」とある祓の所作と一致している。祭物などについて『儀式』践祚大嘗祭儀には、

神祇官、悠紀・主基の両の国司、并せて山城の国・郡司等、荒見河に就き、祓物を陳ね置け。各、五色の薄縄各一尺、木綿二斤、米二升、酒一斗、薄鯉・堅魚・海藻各一連、食薦二枚、干柏六把。並びに国、弁備へよ。

とあるのみで、贖物についての記載は見られない。【写真3】を見ると、贖物である洗米の右上に朱書きで「深祕(秘)」とあることに注目される。つまり、荒見川祓の贖物は、秘儀に属するものであった可能性がある。『儀式』践祚大嘗祭儀に具体的な贖物がみられないことは、官撰の儀式書であるため秘儀である贖物の詳細を記載しなかったのであろうか。仁安三年(一一六八)高倉天皇大嘗祭を記録する『兵範記』にも「贖物」とあるのみで、その詳細は記述されていない。これらの点から『大嘗会拝見私記』は、荒見川祓の贖物について検討する材料を提供しているといえる。

(2)「由奉幣。或云、神祇官三社奉幣」

由奉幣とは、大嘗祭の日時が近づき、祭儀の斎行を伊勢太神宮などへ幣帛を奉りて奉告する儀礼である。国史上の初見記事は平城天皇大嘗祭までさかのぼる。

『日本後紀』大同三年(八〇八)十一月十四日条

辛卯。奉三幣帛於伊勢大神宮。以レ行二大嘗事一也。是夜。御二朝堂院一行二大嘗之事一。

『儀式』践祚大嘗祭儀には、

天神地祇に幣を奉る使を發遣せ。大神宮には、諸王の五位已上一人。中臣の長一人・齋部一人。山城・大和・摂津には、各一人。河内・和泉には、一人。七道には、各一人を、中臣・齋部の二氏相半して、之を差せ。

とあり、大嘗祭当年八月下旬の大祓使の後に發遣される奉幣使(所謂「大奉幣」)についての規定はみられるが、この「由奉幣」については記載が見られない。『北山抄』(巻五)大嘗会事には「大奉幣」のほかに、

可_レ行_二大嘗会_一之由。被_レ申_二伊勢_一事。〔仁和四年十一月十日・天慶九年十一月六日。被_レ立_二三件使_一。安和元年。又有_二此例_一。或御禊以前被_レ立_二云々。〕

と、詳細な次第は見られないが、「由奉幣」について記載している。「由奉幣」の概要は、荷田在満が『大嘗会便蒙』に以下のように記述する。

『大嘗会便蒙』上

次に由奉幣といふ事あり。由とは大嘗会行はるべきよしなり。奉幣とは幣帛を神に奉らせ給ふ義にて、是はことし此月下の卯の日に大嘗会を行はるべきよしを、伊勢、石清水、賀茂の三社へ勅使を以て告らるゝなり。此儀は霜月上旬の内にて日をえらばる。（元文三年、筆者注）は三日を用ゐらる。是には陣座の儀、

神祇官代の儀とて、同日に両度の儀式あり。陣座の儀は上卿以下紫震殿の西廊右近陣座に着て、三社の使を定め仰なり。又内記仰せて三社の宣命を作らしめて奏聞し、是を清書せしめなどする儀なり。此儀畢りてすぐに神祇官代の儀あり。京の東山神楽岡の八神殿（吉田の社の近所にあり、今の人或は誤りて、八神殿を吉田の社と思ふ者あり、）の辺を用ふ。其儀、先行事の弁史以下此所に三社の幣物をつゝみ、上卿も陣座の儀畢りてすぐに此所に来り、三社の宣命を三社の使に渡し、すなはち御幣も此所よりたつるなり。是は昔は神祇官の官舎にて行はれし事なれども、今は神祇官なきが故に神楽岡の八神殿の辺を神祇官の代とたて、此事あるなり。八神殿はむかし神祇官にありし物なればなり。

『大嘗会便蒙』によれば、由奉幣は内裏において、勅使を定めて宣命を策定する「陣座の儀」と、その後東山神楽岡にある八神殿で行われる「神祇官代の儀」が行われ、この「神祇官代の儀」を経て、神祇官代から勅使が発遣されることになる。神祇官は律令制の二官のうちの一つで、天神地祇の祭祀を執行して諸国の官社を総括し、祝部の名帳と神戸の戸籍など、神祇行政全般を掌る役所である。神祇官は中世には衰退し、近世に至って吉田家が神祇官の八神殿を京都東山の神

楽岡の吉田社の内に齋場所を設け、慶長十四年（一六〇九）に神祇官代とされ明治維新まで存続した。¹⁵⁾

元文三年度（一七三八）大嘗祭の由奉幣（発遣の儀）は十一月三日に、内裏での陣座の儀と吉田社の齋場所における神祇官代の儀が行われている。

『大嘗会次第（元文三年）』（『歴代残闕日記』第二十九卷所収）

十一月三日 由奉幣

上卿	九条右大将植基卿
加茂 <small>（筆者注）</small>	勅使 中山中納言榮親卿
石清水	同 広幡大納言長忠卿
伊勢	同 藤波知忠卿

『大嘗会次第（元文三年）』によると、由奉幣の上卿は九条植基、賀茂社への勅使は中山榮親、石清水八幡宮への勅使は広幡長忠、伊勢大神宮への勅使は藤波知忠であったとされている。ただし、『大嘗会儀式具釈』由奉幣次第（陣座儀）の荷田在満の注釈（以下、「在満説」と称す）には、

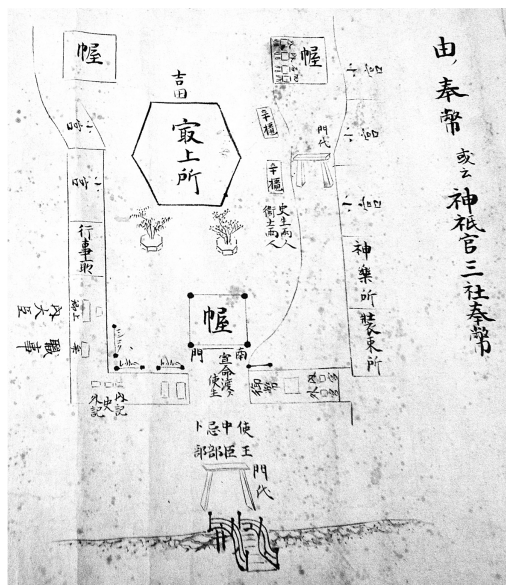
伊勢使の王代兵庫頭賢兼（川越）を充つべき其家の例なり。然るを今度光枝を充てられし事、一会伝奏庭田前大納言（重孝卿）の失錯にして、一会畢りし已後、其沙汰に及べり

とあり、伊勢使の王代は本来は川越賢兼を充てるべきであったが、前大納言の庭田重孝の失錯によって、小佐治光枝が王代とされ、大嘗祭の後に庭田重孝の責任問題に発展してようである。

『植房卿記』元文三年（一七三八）十一月三日条には内裏での陣座儀における宣命策定の様子が克明に記録され、陣座の儀の終了後に「上卿神祇官代参向」とあり、上卿の九条植基が神祇官代に参向したことは記しているが、神祇官代の儀について何も記していないことから、九条植房は神祇官代には赴かなかったと考えられる。また、『八槐記』（広橋兼胤の日記）の同日条も陣座の儀について詳細

に記し、神祇官代の儀の内容について記載はないが、「上卿向三神祇官代」(吉田斎場所)」とあり、神祇官代の儀が吉田の斎場所で行われたことが確認される。

【写真4 由奉幣① 斎場】



【写真4】には、「吉田」「最上所」とあることから、吉田斎場所の図であることがわかり、由奉幣神祇官代の儀を記した図である。また、荷田在満の『大嘗会図式』所載の図よりも細かな箇所まで描かれている。ただし、『大嘗会図式』は上卿座を「九条右大將植基卿」とあるのに対して、本史料『大嘗会拝見私記』は「内大臣」と記すことに疑問を懐かざるを得ない。なぜならば、上卿をつとめた九条植基は元文三年(一七三八)には内大臣ではなく、権大納言であった。⁽¹⁶⁾ さらば、『大嘗会拝見私記』の記す「上卿 内大臣」は史実と矛盾し、史料としての信憑性を失いかねない問題につながるのである。

江戸時代に行われた大嘗会由奉幣の上卿をつとめた人物の官職を示せば以下の通りとなる。

貞享四年(一六八七)	東山天皇大嘗祭	右大臣・鷹司兼熙 ⁽¹⁷⁾
元文三年(一七三八)	桜町天皇大嘗祭	権大納言・九条植基 ⁽¹⁸⁾
寛延元年(一七四八)	桃園天皇大嘗祭	権大納言・大炊御門経秀 ⁽¹⁹⁾
明和元年(一七六四)	後桜町天皇大嘗祭	内大臣・九条道前 ⁽²⁰⁾
明和八年(一七七二)	後桃園天皇大嘗祭	内大臣・一条輝良 ⁽²¹⁾
天明七年(一七八七)	光格天皇大嘗祭	右大臣・近衛経熙 ⁽²²⁾
文政元年(一八一八)	仁孝天皇大嘗祭	内大臣・二条斉信 ⁽²³⁾
嘉永元年(一八四八)	孝明天皇大嘗祭	右大臣・近衛忠熙 ⁽²⁴⁾

右の一覧から明らかなように、大嘗祭由奉幣で内大臣が上卿をつとめた例は、後桜町天皇大嘗祭・後桃園天皇大嘗祭・仁孝天皇大嘗祭の三例しかない。本史料の「上卿 内大臣」の表記が正しいとすれば、後桜町天皇・後桃園天皇・仁孝天皇大嘗祭の由奉幣の時の図となり、その成立は最も早く想定して、明和元年(一七六四)の後桜町天皇大嘗祭のときとなってしまう。しかし、【写真1】の首題には「元文聖代」と記されており、首題の表記が正しいとすれば、本史料はあくまで元文三年(一七三八) 桜町天皇大嘗祭と考えなくてはなるまい。

九条植基は大嘗祭の翌年、元文四年(一七三九)二月三日の内大臣に補任され⁽²⁵⁾ ており、植基の内大臣に補任後に、植基自身が大嘗祭の記録をまとめさせたと考えれば、上卿の座が「内大臣」と記載されていることの説明もつくが、全くの推論でしかない。また、本来は「上卿」となっていたものを、後世に「内大臣」と加筆した可能性も十分に考えられることであろう。本史料に奥書等の制作年代を特定する記述がないことから、首題の「元文聖代」とあることを優先して考え、現段階では九条植基が内大臣となった元文四年(一七三九)二月三日以降に製作されたと解しておき、製作年代の特定については後考を待ちたい。

由奉幣神祇官代の儀の儀式次第は、荷田在満の『大嘗会儀式具釈』に詳細である。

『大嘗会儀式具釈』第五、大嘗会由奉幣次第、神祇官代儀

弁以下着「北庁代座」有「幣裏事」。上卿参「神祇官代」。弁・外記・史出「立南門外」。上卿向「上首」揖。次上卿入「南門」着座。「西方東面」。次使々入「南門」。「東方南北対座」。次上卿以「召使」召「弁」。弁参「膝突」。上卿問「幣物具否」。弁申「具由」。次上卿以「召使」召「外記」。外記参「膝突」。上卿問「使々参否」。外記申「参由」。此序仰「可」賜「使王御馬」。由「上」。次上卿以「召使」仰「可」持「参宣」命於内記「由」。内氣持「筥進立」。次上卿着「北庁代座」。弁以下着座。上卿・弁「西上北面」。外記以下「南上西面」。召使蹲「踞便所」。内記持「宣命筥」置「上卿前」。退着座。次上卿仰「弁令」催「發遣」。弁仰「史」。史以「召使」催「之」。御幣發遣。次上卿以「召使」召「使王」。使王参「膝突」。上卿賜「宣命」。使王取「之」退出。次自「下」葛「起座」内記取「筥退」。列「立」便所。上卿還「着南門座」。次上卿以「召使」仰「可」持「参宣」命於内記「由」。内記置「宣命」於上卿前。次上卿目「石清水使」使参「進膝突」。上卿授「宣命」。使取「之」。還「於南門外」。授「宣命」於次官。次上卿目「加茂使」使参「進膝突」。上卿授「宣命」。其儀「如石清水」。次上卿退出。弁以下出「立南門」儀如「初」。

神祇官代の儀は、弁・史以下によって北庁代の座で幣帛を包むことから始まる。在満説では、

北庁代座とは、庁は政所、昔官舎には皆庁あり。今は官舎なきが故に、八神殿西北の方に幄屋は構へて、神祇官の庁代とす。又神祇官代の南門の内にも幄の屋を構へ、其中にも座あり。是を南門座と云ふ。是に反対して北庁代座と云ふ。其弁の座は幄の南辺、中央より東に在りて北面、史の座は幄の東辺、中央より北に在りて西面、並に葉薦の上に黄緑の帖を敷く。幣は三社の幣物なり。上卿の参向せざる已前に、弁・史以下此所にて之を裹み畢る。

とあり、八神殿の西北に置かれた幄が神祇官代であり、その中で上卿の参向前に幣帛の準備が行われる。【写真4】では「最上所（斎場所）」の左上に描かれた幄

が神祇官代にあたる。

上卿（九条植基）が到着すると、弁（勸修寺顕道）・外記（山口秀昌）・史（壬生盈春）は南門の外に出て上卿を出迎え、上卿は南門内の西側に設えられた座に東面して着座する（【写真4】の「上卿座」）。次に伊勢使・石清水使・賀茂使が参入し、南門内の座に着く。在満説では、

使々とは、伊勢ノ使光枝、石清水ノ使新源大納言、賀茂ノ使右衛門督、此三人南門入る。但南門内座に着くは新源大納言と右衛門督と兩人にて、光枝は着かず。石清水ノ使の座は幄中の北辺、中央より東に葉薦の上に緑縁の帖を敷き、新源大納言此座に南面して着く。賀茂ノ使の座は幄中の南辺、中央より東に同じ如く同じき帖を敷き、右衛門督此座して北面して着く。依りて兩人対座となる。

とあり、南門内の幄が使の座となり、『大嘗会拝見私記』では【写真4】の「最上所（斎場所）」の下に描かれた幄にあたる。また、幄内には石清水使の広幡大納言長忠と賀茂使の中山栄親の座が設けられており、伊勢使の王代である小佐治光枝は幄内には着座しなかったとされる。【写真4】では使座のある幄の下側（南門の外）に「宣命渡ス使王」、「使王・中臣・忌部・卜部」と書かれており、伊勢使は南門の外に列立していた様子が確認でき、在満説の内容と一致している。

次に上卿は召使を通じて弁を召し、弁は膝突（軾）に進み出る。上卿は弁に対して幣物の準備が整ったかを問い、弁は幣物が整ったことを返答する。弁が進み出る軾について在満説は、

膝突は上卿の座の前の右辺（南）に之を敷く。

と軾の位置を述べている。これは【写真4】では「上卿座」の南に「弁」と書かれた座のことであると考えられる。続けて上卿は召使を通じて外記を召し、外記は同じく膝突（軾）に進み出ると、上卿は使が参集したかを問い、外記は参集している旨を返答する。この時に上卿は、使王に御馬を賜る由を外記に伝達する。

次に上卿は召使を通じて、内記に対して宣命を持参するように伝達し、内記は宣命宮を持って進み立つ。在満説に、

少内記伊勢の宣命を宮に入れ持ちて進立つ。

とあるように、この時は、伊勢大神宮への宣命のみを内記が持って進み出る。

次に上卿は北庁代（神祇官代）の座に移動する。弁以下も移動して上卿と弁は神祇官代の幄の中で西を上座として北面し、外記・史は南を上座に西面して着座。召使は便所^{びんしょ}で蹲踞する。【写真4】では幄内の様子は全く記されていないが、在満説には詳細に記述されている。

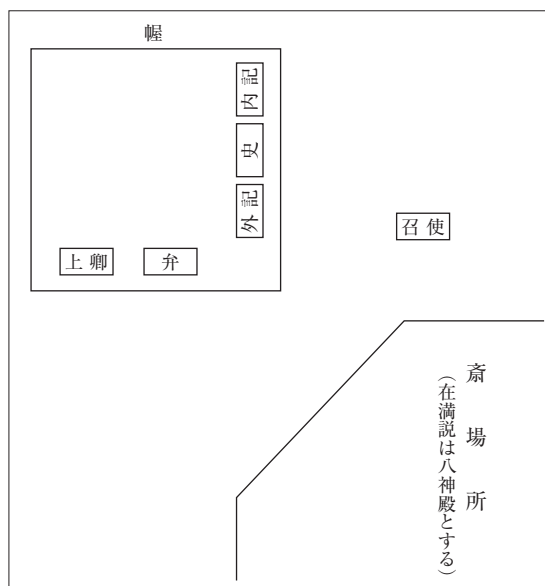
右大將は弁の西にあり。頭道は上卿の東にありて、並に北面、外記の座は幄中の東辺、中央より南に葉薦の上に黄縁の帖を敷き、秀昌之に着く。史盈春宿禰の座は上に注すが如し。秀昌は史の南にあり。盈春宿禰は北にありて、並に西面、是官次にして位次に拘らず。但傍例を考ふるに、官務は大外記には並坐す。いまだ少外記権少外記等と並坐するを見ず。今日神祇官儀に、盈春宿禰出仕せると云ふ事、若くは伝聞の差誤か。他日勘正すべし。蹲踞はウヅクマルと訓す。召使は其座なき故に、便所の地上につくばうて正坐せざるなり。今日は八神殿の後の西の角、秀昌が座の巡に当りて、北面に蹲踞す。

右の神祇官代の配置を整理すれば、下段に示したような図となる。

上卿以下が北庁代（神祇官代）の座に着座すると、内記が宣命宮を持って上卿の前に置き退座する。続いて、幣帛を發遣する旨を弁に伝え、弁は史に、史は召使を介して伝達して幣帛の發遣が行われる。在満説には、

發遣は御幣の發遣なり。あらかじめ八神殿の東北の方にも亦屋を構作り、其幄中の西辺に、八脚案三脚を並べ立て、先に裏畢りたる三杜ま御幣を、其案上に載せ置き、内蔵官人等其所にあり。右大將頭道に仰せて、今は御幣發遣すべきの旨を催仰せしむ。頭道之を盈春宿禰に仰す。盈春宿禰召使を召して之を仰す。

「神祇官代内部の配置図」



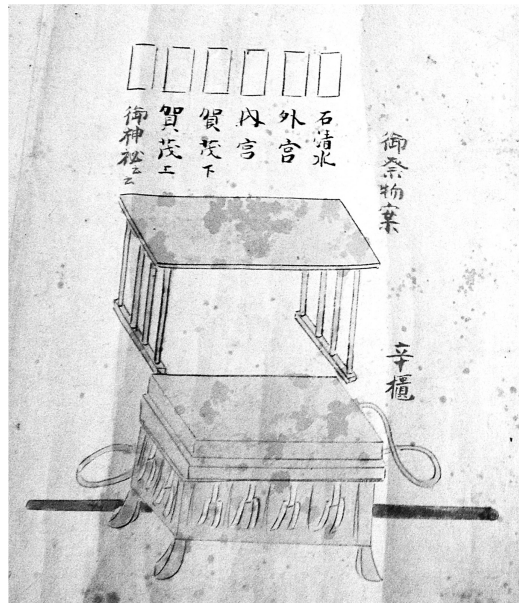
とあり、あらかじめ幣帛は斎場所（在満説は八神殿とする）の東北に設けられた幄の中に置かれていたことがわかる。【写真4】では、「最上所（斎場所）」の右上に描かれた幄にあたる。しかし、在満説では「八脚案三脚」とあるが、【写真4】では「加（賀茂社）」・「石（石清水社）」・「内（伊勢内宮）」・「外（伊勢外宮）」と書かれて、案が「四脚」描かれていることは在満説と相違しているが、神祇官代の儀の様子を窺い知ることができるであろう。

上卿は召使を通じて使王を召し、使王は膝突（軾）を進み出て、上卿から宣命を賜り退出する。その後、上卿以下が北庁代（神祇官代）の座から退き、もとの南門の座に戻る。そして、南門の座において石清水使と賀茂使に対して、それぞれ上卿から宣命を賜り、發遣の儀が終了する。続いて上卿は退出し、弁以下が始めと同じく南門の外に列立して上卿を見送り、由奉幣神祇官代の儀は終了となる。なお、現地における奉幣の儀の様子については、佐古一冽氏の「大嘗会と神宮

―特に大嘗会由奉幣について―」に詳述されている。⁽²⁶⁾

【写真4】には、幣帛を案のほかにも、幣帛を納めるであろう「辛櫃」が置かれた場所が描かれているが、このとき使用された案と辛櫃の図が【写真5】である。

【写真5】 由奉幣② 幣帛案・辛櫃



【写真5】には八脚案と辛櫃のほかにも、奉幣を行う「石清水」「外宮」「内宮」「賀茂下」「賀茂上」のほかに、「御神祕（秘）」と記された幣帛が準備されていたことが確認できる。この「御神祕（秘）」と記された幣帛について、『大嘗会儀式具釈』などの他の史料にまったく記述がなく、荒見川祓と同様に、秘儀に関わる内容まで描かれていることが注目される。現段階では『大嘗会拝見私記』の作者は不明であるが、作者は秘儀の内容を知りうる人物で、記録として本史料を作成した際に、秘儀に関する部分を「御神祕（秘）」と記したということになり、作者を推測する時に重要な手掛かりの一つとなる。

(3) 「大嘗会御当日御庭上并御調度ノコト。大格并見図形」

大嘗宮は、大嘗祭において天皇が神事を齎行する殿舎である。『儀式』踐祚大嘗祭儀に基づいて概要を述べれば、周囲を宮垣で廻らし、正門（南門）・東門・西門・北門が開かれる。宮内は、中央の中籬により東西に中分され、東が悠紀院、西が主基院となる。悠紀院・主基院にはいずれも正殿（悠紀殿・主基殿）があり、このほかに膳屋・白屋・廁屋などが付属する。院内の殿舎は同一規模・規格で、位置は対蹠となる。大嘗宮北門の北には廻立殿が設けられる。齋場となる悠紀殿・主基殿の構造は、南北縦に五間で長さ四丈、広さ一丈六尺、柱の高さ一丈、椽の長さ一丈三尺である。正殿の内部に二部屋からなり、北の三間を室とし、南の二間を堂とした。材料は黒木を用い、屋根は萱葺の上に千木を着け、五尺の堅魚木八枝を置いた。床は地面に束草を敷き、播磨の簀、その上に席を敷いた。壁は草を芯とし、表を伊勢の斑席、裏を小町席で覆った。室には白端の御畳を重ねた神座が設けられ、堂には神事に奉仕する采女らの座が設けられている。廻立殿は大嘗宮の北にあり、東西棟で広さは正殿とほぼ同じである。大嘗宮は朝堂院の龍尾道下の南庭、東の第二堂（含章堂）と西の第二堂（含嘉堂）の間に造営するもので、造営も撤去も悠紀・主基の斎国の人夫によって行われた。⁽²⁷⁾

大嘗宮を設営する場所は、本来は朝堂院であった。しかし、安元三年（一一七七）四月に起きた安元大火によって、大極殿をはじめとする朝堂院などが焼失し、その後は再建されることなく廃絶したため、朝堂院における大嘗祭は、仁安三年（一一六八）の高倉天皇大嘗祭が最後となった。⁽²⁸⁾

元文三年度（一一七三）の大嘗宮については、『大嘗会便蒙』に詳しい。

『大嘗会便蒙』上

先当日の四五日以前までに、修理職の役人大嘗宮を作畢る。其作り様、先紫宸殿の南庭に東西十六間南北十間の柴垣を作廻らす。（昔の垣は東西三十二丈

四尺、南北十五丈なり。) 垣の高さは六尺ばかり、柴は内の方は北山柴、外の方は萩の柴、いづれも二たけなり。竹にて押縁をし、縄にて横に五所ゆふ。四方の角に皮付の松のそへ柱あり。其柱を柴にてふとく包み、上の方開き、すそ細に作る。前日になりては、椎の枝を垣一面にさし廻らす。是を椎の和恵といふ。垣の四方にくの木皮付の鳥居をたつ。但南北の鳥居は垣の中央にあり。東西の鳥居は中央より少し南に寄する。鳥居のはは四つ共に八尺づゝ、高さは南西東の三方は、一のかさぎの下より九尺、北の方ばかりは、二のかさぎの下より九尺なり。さなければ渡御の時御普蓋つかゆる故に、あとより改めらる。(貞観の比の門は、高さ一丈二尺広さ一丈二尺なり。延喜に至りて、四つ共に高さ九尺、ひろさ八尺しなる。) 又東西の鳥居の外一間ほど置て、南北二間の袖垣をたつ。 (是を屏籬といふ。昔は長さ二丈五尺あり。) 垣の作り様は四方の垣と同じ。垣の南北の端にはそへ柱あり。是も柴にてふとくつゝ、む、四方の垣の角に同じ。又四方の鳥居に開戸あり。是も同じく柴にて作り、割竹にてふちを四方に廻し、表裏よりもすぢかひにあや杉の如くにあて、くわんぬきは松の皮付、藤にてからくりさしこむ。(昔の扉は楮にて作る。) いづれも外じめなり。又柴垣の内東西南北の中央にあたりて、東西へくぐるべき鳥居を一つたつ。是もくの木にて作る。高さはは南西東の鳥居に同じ。只此鳥居には開戸なし。此鳥居の南の柱より南の方、北の柱より北の方へ、各二間半余づゝ、柴垣をたつ。(昔は此垣、長さ南北十丈の内、南のはしに小門を開き、門より北に九丈南に一丈ありて、中央に門なし。) 其垣の南北はづれに、各一間ほどづゝ、の柴垣を東西の行にたつ。(是も屏籬といふ、昔は二丈あり。) 其東西のはづれの柱は柴にてつゝ、む。惣じて垣の作り様四方の柴垣に同じ。扱東の鳥居の内に一間しりぞけて、悠紀の御殿をたつ。此内にて天神を祭り給ふ。たて様は南北五間、東西三間、(昔は長さ四丈、広さ一丈六尺、) 先あつか草とて、青草を地に敷、其上に竹簀子をかき、其上に近江おもてを敷、(昔

大嘗宮に用ゐられしは、すべて葛野席、小町席、伊勢ノ斑席などなり。今用ゐらる、はすべて近江表なり。) 南北五間の内、北の方三間を内陣とし、南の方二間を外陣とす。内外陣の堺には、東西より四尺五寸づゝ、のはり出しあり。中の一間半が間は、筵にぬきをあてたる開戸四板、二板づゝ、てふつがいにて両開きなり。柱は何れも松の皮付、たち様は南の方北の方は一間半づゝ、の間にて、両はしと中央に一本つゝ、ばかりあり。西の方東の方は、内陣は一間づゝ、の間にて、北の端と外陣の堺しの柱の外に、間柱二本なり。外陣は一間半とまなかとの二間にて、南のはしの柱よりまなか北に一本あり。そりより内陣の堺の柱まで一間半なり。此外に東西のはり出しのとまりに一本づゝ、惣て内外陣の柱数十六本也。扱四方に竹のえんあり。

(中略)

扱又柴垣の西の鳥居の内に、一間退けて主基の御殿をたつ。此内にて地祇を祭り給ふ。たて様、入り口付様まで、悠紀の御殿に少しも異なる事なし。只かつを木のそぎ様、外の方をそがずして下の方をそぐ。是より外にはかりたる所なし。

扱紫宸殿の東庭内侍所の西の方少し北へよりて廻立殿をたつ。是は大嘗宮に渡御あらんとて、先此所に渡御して御湯をめされ、御装束を改めさせ給ふ所なり。たて様南北三間東西五間。(昔は長さ四丈、広さ一丈五尺) 但西の方三間を一間とし、是には其中二間四方に畳をしき、東の方二間を一間とし、是き竹簀子なり。其二間の堺南北三間の内、中の一間は開戸二枚にて、南と北との一まづゝ、のはり出しはね近江おもてにぬきを入る、事、大嘗宮の如し。柱のたち様は皆一間づゝ、の間にて、四面合せて十六本、二間の堺に二本、すべて柱数十八本なり。四方にえんなし。南おもて西より第四の柱と第五の柱との間一間に箱段を付けて、渡御の時降りさせた給ふ道とす。

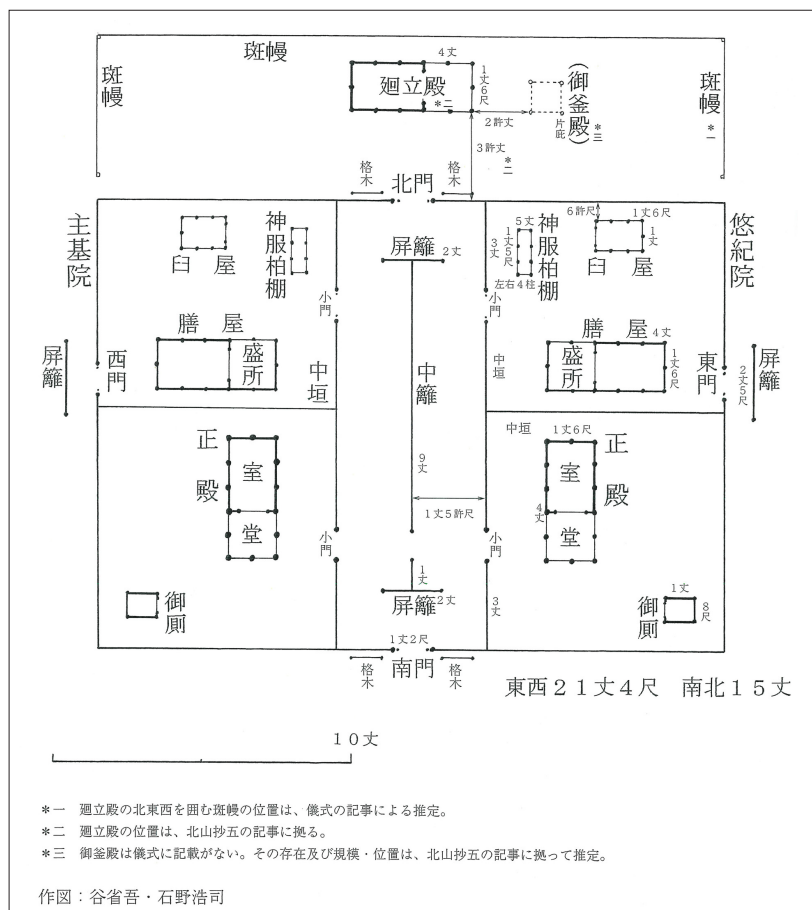
(中略)

(中略)

(中略)

『大嘗会便蒙』では、まず大嘗宮を囲む垣について詳述し、悠紀殿・主基殿・廻立殿及び膳屋などの建築様式について述べている。その中で荷田在満が「昔」という文言を利用して、『貞観儀式』などと比較している様子が窺い知れる。古儀の大嘗宮（『貞観儀式』）は、谷省吾氏・石野浩司氏の復元が詳細であるので参考にした³⁰。また、元文三年（一七三八）度の大嘗宮図は、『大嘗会拝見私記』のものを【写真6】【写真7】【写真8】【写真9】まで分割して掲載している。

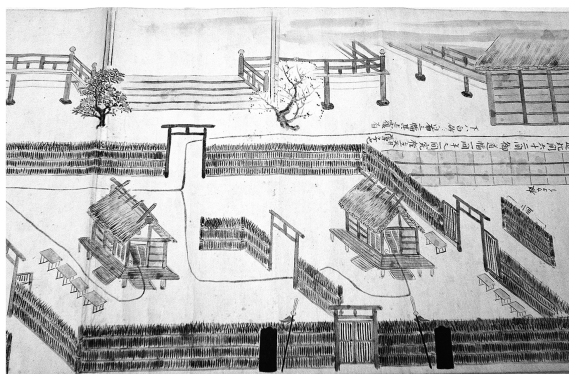
桜町天皇の大嘗祭（佐野）



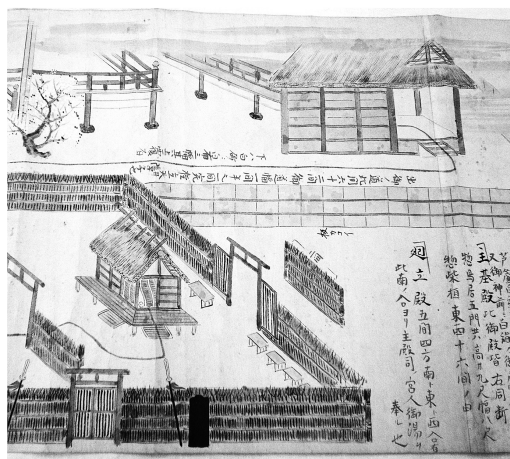
【写真6 大嘗宮及び庭上図①】



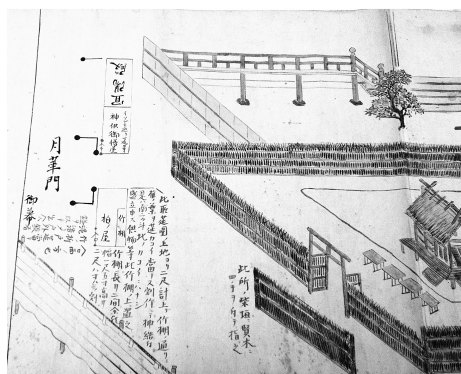
【写真8 大嘗宮及び庭上図③】



【写真7 大嘗宮及び庭上図②】



【写真9 大嘗宮及び庭上図④】



『貞観儀式』の復元図と『大嘗会拝見私記』（写真8）とを比較すれば、相違があることは一目瞭然である。まず、悠紀院・主基院の正殿（悠紀殿・主基殿）の北側に設けられていた神饌などを準備する膳屋が大嘗宮の外へ移っている。膳屋については『大嘗会便蒙』が「昔の悠紀主基の膳屋は、柴垣の内にあり」と指摘するが、白屋と御厠について『大嘗会便蒙』に記述はなく、『大嘗会拝見私記』にも図が掲載されていないので、このときは設営されなかったものと考えられる。大嘗宮を囲む垣については、膳部などが大嘗宮内に設けられなくなったことから、『儀式』の規定よりも全体的に垣が縮小したことは当然である。なかでも明らかな違いは、『儀式』では鳥居が設けられた「中籬」^{なかさき}から東西に各一丈五尺ばかりの位置に「中垣」^{なかがき}があり、「中垣」には小門が設けられ、その中に正殿（悠紀殿・主基殿）が建てられている。しかし、『大嘗会拝見私記』（写真8）を見ると、「中垣」は設けられておらず、「中籬」が悠紀殿と主基殿を区切る堺となっている。『大嘗会便蒙』にも「中垣」に関する記述は見られない。また、東西の門（鳥居）についても、本来は付属施設であった膳屋への通用門としての役割であったのであろう。このときは悠紀殿・主基殿の東西にあたる位置に建てられている。もともと正殿（悠紀殿・主基殿）へは「中垣」に設けられた小門しか出入り口がなかった。これも付属施設が大嘗宮の外に設営されたための変化の一つである。悠紀殿・主基殿・廻立殿について、『大嘗会拝見私記』には、以下のような朱書きの注記がある。

悠紀殿 「東西三間。南北五間。」 松・杉・桧・ホウフノ木等五品。何レ

毛皮付ニテ造レ之。口訣也。

御屋根皆茅葺。

四方柱ノ数十四本。横亘通り貫有。

其シキ居ヨリ四方ハ竹エンナリ。

惣壁代ハ皆近江表ナリ。入口三方ニ有ニ有。

正面南ト東西ト三方如レ図。

芦簾白絹ヘリ掛レ之。其内白絹ノ戸帳。

又御神前ニ白絹ノ御戸帳掛レ之。

主基殿。此御殿皆右同斷。

惣鳥居御門共。高サ九尺。幅八尺。

惣柴垣東西十六間ノ由。

廻立殿。五間四方南ト東ト西合有。

此南ノ合ヨリ主殿司ノ官人御湯ヲ奉ル也。

この注記を前掲の『大嘗会便蒙』と比較すれば、悠紀殿について南北五間・東西三間という建物の大きさ、四方に竹で作られた縁側があることなど、基本的な構造については一致している。しかし、柱の本数については、『大嘗会便蒙』が「惣て内外陣の柱数十六本也」とあるのに対して、「四方柱ノ数十四本」と二本少なく記載されるなど若干の相違も認められる。主基殿については「此御殿皆右同」とあり、悠紀殿と同じ構造であることから記載を省略していることが確認できる。廻立殿は『大嘗会便蒙』は「たて様南北三間東西五間」とあるのに対して、「五間四方南ト東ト西合有」とあり、五間四方と記載して大きさが異なっている。その他の記載で異なっている箇所を挙げれば、悠紀・主基の膳屋についてである。『大嘗会便蒙』では、月華門の南廊に悠紀の膳屋、月華門と宜陽殿の間の廊に主基の膳屋が設けられている。これを【写真9】で確認すると、『大嘗会拝見私記』では、悠紀の膳屋を「柏ノ屋」、主基の膳屋を「神供御膳屋」と記載され、『大嘗会便蒙』とは表記がことなっている。「柏ノ屋」には「竹棚」があり、「神供御膳屋」には竹棚は見られないことから、『大嘗会便蒙』の悠紀の膳屋には竹棚を作り、主基の膳屋には作らないという記述と一致し、「柏ノ屋」と「神供御膳屋」は、それぞれ悠紀膳屋・主基膳屋のことである。

【写真】には廻立殿から悠紀殿・主基殿へと筋が書かれており、その脇に朱書

きで、

出御ノ道。此間六十二間。御道幅一間半也。一間宛レ柱立三天井障子一也。

下ハ白砂ニ白布三幅。其上覆有。

とあり、天皇が廻立殿から悠紀殿・主基殿への出御の際に、渡御される道筋であることがわかる。渡御される御道には、白砂が敷かれ、その上に白布が覆っていたと推測される。『儀式』踐祚大嘗祭儀には、

戊の刻すめらみこと、鸞輿とりのつるぎ、廻立殿くわいりふでんに御す。主殿寮おもとのりやう、浴湯ゆあみを供レ。即ち、祭服みそを着けたまひ、大嘗宮おほほのみやに御す。大藏省おほくらうのつな、預め二幅の布単を以ちて、其の通途みちに鋪け。

〔其の宮中の地面に鋪くに、八幅の布単を以ちてせよ。上に宮内の輔二人、左右に膝行き、葉薦かへを敷け。掃部の丞以上二人、後に従ひ、且つ之を巻け。〕敢て踏ふまざれ。還りますにも亦また、之かくの如くせよ。〔其の葉薦は、掃部寮かじりもの、之を設けよ。〕

とあり、御道の道敷は、あらかじめ大藏省が準備し、二幅の布単が敷かれていた（柴垣の内には八幅の布単が敷かれ、その上に二幅の布単が敷かれる）。さらに天皇が渡御されるときには、天皇の御歩に従って宮内の大輔・少輔が左右に膝行（膝をついて進む）して葉薦を敷き、天皇の後ろに従っている掃部丞以上の二人が巻き取る葉薦役が奉仕していた。元文三年度（一七三八）については『大嘗会便蒙』に詳述される。

『大嘗会便蒙』下

其道大藏省豫鋪ニ一幅布単。宮内輔以ニ葉薦ニ随ニ御歩ニ敷ニ布単上。掃部寮随ニ御後ニ巻レ之。人不ニ敢踏ニ。

是は廻立殿より大嘗宮まで渡御の道なり。先だちて大藏の官人二幅の単の布敷置。（中略）昔は柴垣の内の地面には、八幅の布を敷と見えたり。今はしからず。宮内は掃部の管領の官なる故に、葉薦敷なり。今度は生嶋宮内大輔治孝朝臣これを勤む。是は一通り布単を敷たる上に又葉薦を敷て、

其上を渡御し奉らしむ。但前方に敷おかずして、御歩次第に御さきへせんぐりに膝行して敷ゆくなり。昔は宮内ノ輔兩人左右に膝行して萱の薦を敷とあり。今は然らず。掃部の官人は御跡に随ひ是を巻。但一度にまかずして、御歩次第に御あとよりせんぐりにまき行なり。天子より外の人は此薦をふまず。但関白は御裾を持給ふゆゑ少しは踏給はざれば叶はず。

『大嘗会便蒙』によれば、元文三年度(一七三八)は廻立殿から悠紀殿・主基殿までの渡御の御道は、『儀式』踐祚大嘗祭儀のように、垣の内には八幅の布単が敷かれ、その上に二幅の布単が敷かれることなく、すべて二幅の布単が敷かれていた。また、前方の葉薦役は『儀式』では、宮内輔二人(大輔と少輔)が奉仕することになっていたが、この時は宮内大輔であった生嶋治孝が一人で奉仕し、天皇の御祭服の御裾を関白一条兼香が持つて御歩が進められたことが確認され、本来は渡御の御道は天子以外は踏むことを許されないが、関白は御裾を持つているため踏んでしまうことがあるという⁽³¹⁾。

御道に敷かれる布単の幅は、『儀式』踐祚大嘗祭儀・『大嘗会便蒙』ともに「二幅」であるが、『大嘗会拝見私記』は「白布三幅」とあり、他の記録と相違がみられる。さらに布単の下には「白砂」が敷かれていたとあり、これも『儀式』や『大嘗会便蒙』にはみられない記述である。

次に『大嘗会拝見私記』に書かれている渡御の御道筋について考察したい。渡御の御道筋についても『大嘗会便蒙』に詳述されている。

『大嘗会便蒙』下

其道大藏省豫鋪^二幅布単^一。宮内輔以^二葉薦^一随^二御歩敷^一布単上^二。掃部寮随^二御後^一卷^レ之。人不^二敢踏^一。

是は廻立殿より大嘗宮まで渡御の道なり。先だちて大藏の官人二幅の単の布敷置。其敷様廻立殿の竹簀子の間の南の方へ下る踏段の下より南へ敷、板圍の手前八尺ばかりの所より西の方へ折て敷、大嘗宮の北の鳥居の前よ

り南へ折れ敷、鳥居をくぐり、行当りの神垣と鳥居の中央より西に折て敷、神垣の西の端と主基殿のえんの端との中央より南に折て敷、正中の鳥居の前より東へ折て敷、鳥居と悠紀殿の西のえんとの中央より南に折て敷、南の柴垣と悠紀殿の南のえんの端との中央より東へ折て敷、南階の中央に当りて北へ折て階下まで敷、是悠紀殿へ渡御の道なり。

(中略)

遷^二御主基嘗殿^一

此道もまた大藏の官人、二幅の布の単を敷く。但廻立殿より大嘗宮の北の鳥居の内までは、悠紀の時の道に同じ。北の鳥居を入て、行当りの^(神力筆者注)袖垣と鳥居との中央より東へ折て敷、神垣の東の端と悠紀殿のえんの端との中央より南へ折て敷、正中の鳥居の前より西へ折て敷、鳥居と主基殿の東のえんのはしとの中央より南へ折て敷、南の柴垣と主基殿の南のえんの端との中央より西へ折て敷、南階の中央に当りて北へ折て階下まで敷て、此上を渡御あり。宮内ノ輔の葉薦をしき、掃部寮のこれをまくより以下、路次の供奉并渡御畢りて、大藏宮内以下鳥居の外に出、関白外陣の西壁の下に着座し給ふ迄悠紀の時に少しも替る事なし。ことしは此遷御丑ノ刻に及べり。

『大嘗会便蒙』によると悠紀殿への渡御の御道筋は、廻立殿を出て西に進み、大嘗宮の北門(鳥居)から大嘗宮域に入る。中籬と主基殿の間を通り、中籬の鳥居をくぐり、悠紀殿の南階から殿内に入御される。これは『大嘗会拝見私記』とも一致していて何ら問題はない。悠紀殿の儀が終了後に天皇は廻立殿に還御され、改めて主基殿へと渡御される。主基殿への渡御は、大嘗宮北門までは同じであり、大嘗宮域に入り、中籬と悠紀殿の間をとって、中籬の鳥居をくぐり、主基殿の南階から殿内に入御されると『大嘗会便蒙』は記述している。しかし、『大嘗会拝見私記』では、大嘗宮北門から主基殿の西側を回り、主基殿の南階から殿

内に入るように記載されており、主基殿渡御の御道が誤っていることが明らかである。

現段階では、これを単なる誤りとししか指摘はできないが、次の「悠紀・主基両御殿御調度」には「深祕之儀不_レ可_レ説」とあり、「荒見川祓」・「由奉幣」と同様に神事に関しては秘儀を知り得る人物の記録を基にしている可能性がある。つまり、『大嘗会拝見私記』の筆者（あるいは基となる記録を残した人物）について想像をたくましく考えれば、神事（秘儀）の準備などには関わっていたが、大嘗宮の設営、あるいは実際には大嘗祭に参列していない可能性もあるのではないだろうか。しかしながら、これも史料的な制約によって推論の域を出ず、これ以上の確証は得られない。

(4)「悠紀・主基両御殿御調度」

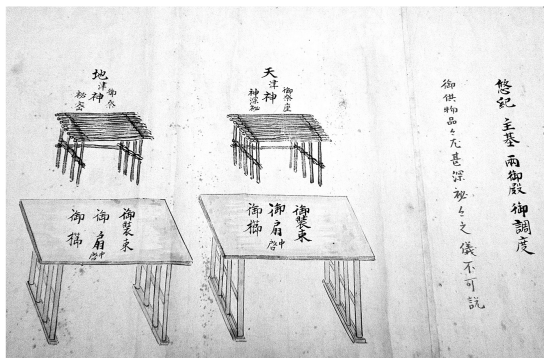
大嘗宮内で用いられる物について、古儀の大嘗祭を規定する『儀式』踐祚大嘗祭儀には次のように見られる。

其の大嘗殿に須あるところの、長帖十二枚、短帖六枚、薦十六張、預め掃部寮をして、造り備へしめよ。御服二具、衾三条、繪枕二枚、絹の幟頭三枚、望陀の布の単二条、幌二具、筥三合、并せて人給の衾八条、単四条、預め縫殿寮をして、縫ひ備へしめよ。

『儀式』の規定では、大嘗宮内で用いられる長帖・短帖・薦は掃部寮が、御服・衾・繪枕・絹の幟頭・望陀の布の単・幌・筥・人給の衾・単は縫殿寮が事前に準備することになっていた。その他にも大嘗祭卯日の神事当日には北野斎場から大嘗宮への神饌行列の中に様々な供進物が見られる。また、官符宣旨例第三十三では、神祇官からの申請により、大嘗祭に用いる調度（卯日神事に用いる海老鰯槽・拔穂使の明衣料・斎国斎場の稲実殿の鎮祭料・卯日神事に用いる雑器料と舗設料）の供進を民部省・大蔵省・宮内省の三省に命じる太政官符が下されることになっていた。⁽³²⁾

『大嘗会拝見私記』に見られる悠紀殿・主基殿の調度は【写真10】【写真11】【写真12】【写真13】に見られ、天津神・地津神の柅案二脚、御装束・御扇（中啓・鰯船・御手水具・御手拭・多志良加の案、神服入細籠、神燭台、四角御燈台、八角御燈台、八角大方、八角小方（以上【写真11】）、水船、八重疊、蘆御簾、坂枕、神御沓（或云、綿沓又錦沓）（以上【写真12】）、御桶（【写真13】）が描かれている。この他に【写真11】には、丸いものが四つずつ納められた筥三合を置き、「祕々」と朱書きされた案が描かれている。なお、皇學館大学に現在寄託されている鈴鹿家所蔵の『大嘗祭史料』には、江戸期の大嘗祭における大嘗宮の殿舎、神座料、神饌・神饌具、調度の一覧が記された書付（資料番号一三八）があるが、年次未詳のため本稿では紹介するのみにとどめておきたい。⁽³⁴⁾以下、『大嘗会拝見私記』に掲載されている調度について確認していく。

【写真10 悠紀殿・主基殿の御調度①】



「悠紀主基両御殿御調度」に続けて、朱書きで「御供物品々。左甚深祕之儀不_レ可_レ説」と注記され、これまでと同様に秘儀に関わる内容の図や説明は省略されている。【写真10】上部の楕案は、悠紀殿・主基殿において供進される神饌のための案と推測される。神饌は描かれていないが、「天津神、御祭座、神深祕・「地津神、御祭、祕密」と記されていることに注視する必要がある。前掲の『大嘗会便蒙』には「悠紀の御殿をたつ。此内にて天神を祭り給ふ」・「主基の御殿をたつ。此内にて地祇を祭り給ふ」とあるように、荷田在満の見解と一致している。しかし、大嘗祭の御祭神については諸説あり、単純な問題ではない。

大嘗祭の御祭神に関する諸説は真弓常忠氏の論考があるが、それをさらに補う形で加茂正典氏が整理されているので、本稿では加茂氏の論考を参照したい。⁽³⁶⁾

- (1) 天照大神……一条兼良『代始和鈔』、真弓常忠氏「大嘗祭の祭神」、岡田莊司氏「『真床覆衾論』と寢座の意味」。⁽³⁸⁾

- (2) 天照大神、天神地祇……後鳥羽上皇『後鳥羽院宸記』建暦二年(一二二二)十月二十五日条、二条良基『永和_二大嘗会記』、『大嘗会神饌仮名記』。

- (3) 悠紀、主基両殿別神……卜部兼俱『唯一神道名法要集』、忌部正通『神代卷口訣』、荷田在満『大嘗会儀式具釈』。

- (4) 御饌八神、天照大神……川出清彦氏「大嘗祭における稲のお取扱について」、三品彰英氏「大嘗祭」、松前健氏「大嘗祭と記紀神話」。⁽⁴¹⁾

- (5) 海原主宰神の大綿津見神や地方豪族の祖神……水林彪氏「記紀神話と王権の祭り」。⁽⁴²⁾

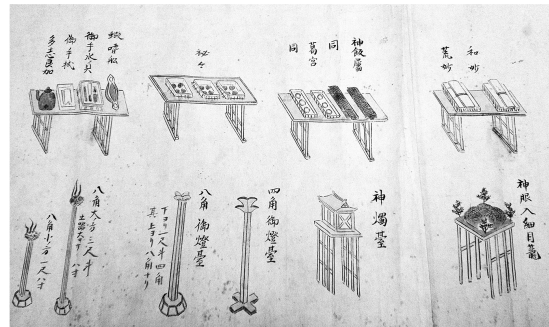
- (6) 豊穰・育成に関わる稲魂のごとき一对の神霊……森田悌氏「嘗の祭りの祭神」。⁽⁴³⁾

右のように加茂氏が整理された大嘗祭の御祭神に関する諸説に従えば、『大嘗会拝見私記』は(3)説の立場をとっていることが明らかであるが、本稿では御祭神

に関しての言及は差し控えたい。⁽⁴⁴⁾『大嘗会拝見私記』の作者について、神事(秘儀)の準備などには関わっていたが、大嘗宮の設営、あるいは実際に大嘗祭には参列していない可能性を前述した。この点も含めて、『大嘗会拝見私記』の楕案に「天津神」・「地津神」とある表記について考えると、荷田在満の影響を受けている可能性も視野に入れて考える必要がある。すなわち、『大嘗会便蒙』の上梓以降に、その影響を受けた可能性も考えておく必要がある。ただし、『大嘗会便蒙』の影響を受けていたとすれば、主基殿への渡御の御道筋が『大嘗会便蒙』と異なるなどの疑問もあり、作成そのものが『大嘗会便蒙』の影響を受けたとは考えにくい。この場合、「甚深祕之儀不_レ可_レ説」と注記があることから、本来は略図のみが描かれていたものに、後世になって『大嘗会便蒙』の影響を受けた者が加筆した可能性も出てこよう。しかし、現段階ではこれ以上の考察は、史料的な制約から難しい。

【写真10】の下部には、「御装束、御扇(中啓)、御櫛」と記された八足案が描かれている。これは第一に悠紀・悠紀両殿の神座に奉奠される繪服・匳服が想定されよう。しかし、【写真11】には「神服入細目籠」があることから、繪服・匳服と決し難い。また、天皇がお召しになる御祭服と考えれば、『儀式』に「御服二具」とあり、悠紀殿用と主基殿用が用意されたと考えられる。しかし、「御扇」と「御櫛」については、『儀式』及び『延喜踐祚大嘗祭式』御服条に記載がないことから、天皇の御祭服と即断することも現段階では控えたい。「御櫛」は、『儀式』には御禊行幸の列次の中に「御櫛机」が見られるが、他所には確認できない。「御扇」は、『儀式』には記載されていない。特に「御扇」の下に「中啓」と記されていることに注目される。「中啓」は末広扇とも呼ばれ、室町時代ころより用いられるようになったと言われている。⁽⁴⁶⁾しかだつて、「御扇(中啓)」が大嘗祭で用いられているとすれば、近世に復興された際と考えられよう。

【写真11 悠紀殿・主基殿の御調度②】



【写真11】の右上に「和妙・荒妙」が見える。和妙・荒妙は、神服である繪服・

龜服の御料である。和妙は、『儀式』では、神服使を三河国に遣わして神服を織る長二人・織女六人・工手二人を卜定し、卜定された人々が奉仕して北野斎場の服院で奉織される。また、荒妙（龜妙）は、阿波国の忌部が奉織し神祇官に納められていた。しかし、『大嘗会儀式具釈』（巻六）には、「但昔の大嘗供神のにぎたへは、三河国の神服の織りたるを用ひ、あらたへは必ず阿波国の忌部の織りたるを用ふ」とあり、わざわざ「昔の大嘗」と断わっていることから、元文三年（一七三八）の大嘗祭に用いられた和妙・荒妙は、それぞれ三河国の神服と阿波国の忌部が奉織したものではないということが明らかである。

【写真11】の右下の「神服入細目籠」は、繪服・龜服を納めている。繪服案は供進物行列に加わり北野斎場から大嘗宮まで運ばれるが、龜服はあらかじめ神祇官に弁備され、朱雀門で供進物行列に合流する。『儀式』には、

其の行列は、（中略）次に繪服の机。〔細籠に納め、案の上に置き、神服二人之を昇け。青摺の布の衫・木綿臺を着けよ。案長さ四尺二寸、広さ二尺、高さ三尺八寸。〕

（中略）

朱雀門の前に到り、須臾留止れ。是より先、阿波国の忌部織るところの龜妙服〔神語に所謂阿良多倍は是なり〕は、預め神祇官に弁備へ、納るるに細籠を以ちてし、案の上に置き、四角に賢木を立てよ。

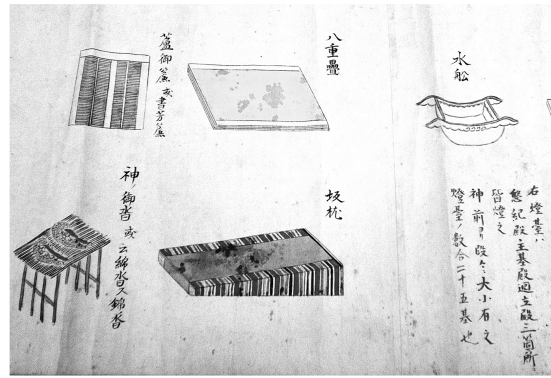
とあるように、繪服案には青摺の布の衫と木綿臺が付けれられ、龜服案には四角に賢木（榊）が立てられた。【写真11】の「神服入細目籠」には、四角に榊のような木が立てられていることから、『儀式』の規定通りならば龜服案の図であると推測される。しかし、『大嘗会儀式具釈』（巻六）には、「此繪服龜服各竹のかまた（俗にいふ「ひげこ」）に入れ四角に龍眼木の葉を刺して、八脚の案に載す」とあり、元文三年度（一七三八）は繪服・龜服ともに四角に榊が立てられていたことになる。

【写真11】の上段には、「神飯属」・「蝦蟇船」・「御手水具」・「御手拭」・「多志良加」が描かれている。これらはいずれも大嘗宮内で用いられる手水具・神饌具である。食薦は、竹や葦や薦を粗く編んで作った敷物で、その上に神饌や御箸を奉安する。神食薦（『大嘗会拝見記』では「神飯属」）は、悠紀殿・主基殿で用いる神の御料である。この他に天皇の御料である御食薦もある。『大嘗会儀式具釈』（巻六）には、

八姫并に高橋氏等神食薦を捧げて更に北に行き、南に向ひて列なり候す。戸外に候す。最姫、神食薦を短帖の右の上に捧ぐ（今神の食薦を置くところは神座の東辺、神座の中央より南にあたりて異向に、裏付の白縁の短帖を敷きたる上に置く。）次姫、御食薦を最姫に伝ふ。最姫取りて同じ畳の上に敷く。

とあり、神食薦と御食薦は悠紀殿・主基殿の中央神座の東に置かれ、神と天皇との御膳の供進儀礼が行なわれる。この時に奉仕したのが采女八人と内膳司の高橋

【写真12 悠紀殿・主基殿の御調度③】



【写真12】には、「水船」・「八重畳」・「蘆御簾」・「坂枕」・「神御沓」が描かれている。水船は『儀式』・『延喜践祚大嘗祭式』には見られず詳細は不明であるが、文字通り水をたくわえておく器と推測される。

八重畳は、『儀式』には「白端の御畳」、『延喜践祚大事式』大嘗宮条に「白端の御帖」と見え、縁が白布の御畳が正殿室内の中央に鋪設される。『延喜掃部寮式』践祚大嘗会条に「西冠、官人已下掃部已上卜食者十人、持御座等物」。自大嘗宮北門入。鋪白端御帖十一枚。布端御坂枕一枚。於悠紀正殿中央。又設打払布一条「納楊宮」とあり、卯日の酉刻に掃部寮の官人が大嘗宮北門より参入し、「白端御帖十一枚」などを鋪設する。その寸法は、『延喜掃部寮式』年料鋪設条の六月神今食御料に見える。

蘆御簾は、刃に自生するイネ科の多年草である葦の茎を編み作った簾で、『儀式』には、

桜町天皇の大嘗祭（佐野）

其の南に、縦に五間の正殿一字（中略）北の三間を以ちて、室と為よ。（中略）南の二間を以ちて、堂と為よ。（中略）……其の堂の東・南・西の三面は、並びに表は葦の簾、裡は席の障子。但し、西面の二間は、簾を巻けてあり、堂内の室との境を除く三面に、表は葦の簾を掛け、裏側には席障子を設けていた。但し、西側の簾は巻き上げられていた。

坂枕について『儀式』には、
既にして、掃部寮は、白端の御畳を以ちて、席の上に加へ、坂枕を以ちて、畳の上に施けよ

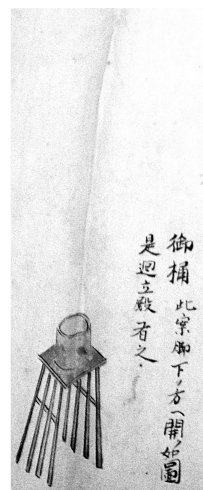
とあり、神座の御畳の上に置かれる御枕である。白布の縁で編んだ薦を芯とする枕で、『延喜掃部寮式』年料鋪設条の六月神今食御料に「白布端坂枕一枚〔長三尺。廣四尺〕」とあり、その材料は、同条の六月神今食神事料に「御坂枕一枚〔長三尺。廣四尺〕料。編薦一枚。織席一枚。端料曝布一尺七寸五分。麻二両、木綿一両」と規定されている。『大嘗会儀式具釈』（巻六）には、

坂枕と云ふは、大嘗宮神座の八重畳の下に敷く枕なり。其制今の様は知らず。とあり、元文三年度（一七三八）の様式はわからない。また、『儀式』では坂枕の鋪設は掃部寮官人が行う規定になっているが、『大嘗会儀式具釈』（巻六）には、「参議弁昇坂枕」とあり、元文三年度（一七三八）は、参議と弁が大嘗宮まで坂枕を持参したようである。

神御沓は、神座の北側に北向きに置かれる神の御料である錦御沓である。『大嘗会儀式具釈』（巻六）には、

此畳は是より下の畳と、南の端を揃へて敷く故、北の方は三尺あくなり。其あきたる所六尺の畳の上に錦の御沓一双を北向に置く。

【写真13 悠紀殿・主基殿の御調度④】



【写真13】の「御桶」は廻立殿で用いられる調度品の一つである。『大嘗会拝見私記』は「御桶」の下に、

此案、脚下ノ方へ開ク。如レ図。
是廻立殿有レ之。

と注記しており、八足案は他の物と異なり、下方へいくにつれて脚が開く形状の案が使用されており、これは廻立殿に置かれていたとある。『北山抄』大嘗会事に「木工寮造「廻立殿」〔卯酉為妻。東南有レ戸〕、東去二許丈。造三片庇「為御釜殿」とあり、廻立殿の東の二許丈の所に片庇の御釜殿が設けられていた。廻立殿では天皇が浴湯をされることから、浴湯に関わる調度と推測し得るが、これ以上の断定は難しい。

(5) 「後ノ御節会ノ御調度」

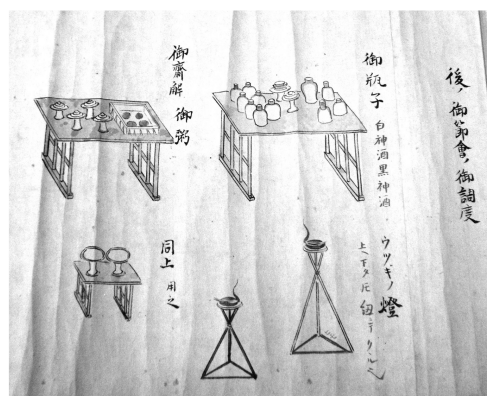
大嘗祭の卯日神事が終了し、翌日から節会が三日間行なわれ、それぞれ辰日節会(悠紀節会)・巳日節会(主基節会)・午日節会(豊明節会)と称された。元文三年(一七三八)は十一月十九日の卯日神事に続き、二十日・二十一日・二十二日に節会が行なわれている。⁽⁵³⁾『儀式』踐祚大嘗祭儀では、豊楽院で行われていたが元文三年(一七三八)は紫宸殿において執り行なわれている。⁽⁵⁴⁾また、『儀式』では辰日と巳日の節会には、天皇が御される悠紀帳と主基帳とがそれぞれ舗設されていたが、『大嘗会儀式具釈』(巻七)に、

其帳、昔は悠紀帳主基帳とて帳を二つ設け、今明両日共に先悠紀帳に御し、後に主基帳に御せらる。今は帳は一つにして、其の廻りに悠紀の屏風を立廻らせば悠紀帳とよび、主基の屏風を立廻らせば主基帳とよぶのみ。

とあり、元文三年度(一七三八)は御帳は一つだけが準備され、周りに立てる屏風によって悠紀帳と主基帳を区別していた。これは平安時代の豊楽院よりも狭い内裏の紫宸殿を会場としていたための変化であろう。

【写真14】は、節会の時に用いられる調度品の図である。

【写真14 節会の御調度】



御瓶子には「白神酒」・「黒神酒」と朱書きされている。『大嘗会儀式具釈』(巻七)に「次供「白酒黒酒」〔各四杯。〕賜「臣下」とあり、このときに用いられた調度品であると推測される。

また、解斎とは神事が終り、それまでの潔斎を解くことをい、神今食の翌朝に天皇が召し上がる御粥を「解斎の御粥」という。『延喜主水司式』には踐祚大嘗会解斎七種御粥料として、米・粟・黍子・稗子・藁子・胡麻子・小豆を各二斗、

塩二顆、陶瓮・塙を各七口、土塙七合、鏡形・片坏を各十口、阿世利盤七口、洗盤四口、麻笥盤二口、中取案・切案を各二脚、陶白・土火炉を各二口、炭二斛、白米九升、漿料著足土塙四合、瓮三口、炭六斗が規定されている。

そのほかにも「ウツギノ燈」が調度品として描かれている。

(6) 「御蓋」

御蓋は、天皇が大嘗祭に渡御されるときに差し掛けられる菅笠である。『儀式・踐祚大嘗祭儀』には、

車持朝臣一人、菅蓋を執り、子部宿禰・笠取直各一人共に膝行き蓋の網を執れ

とあり、大嘗宮への渡御の際には車持朝臣・子部宿禰・笠取直の三人が奉仕した。元文三年（一七三八）の諸役は『大嘗会儀式具釈』（巻六）によれば、車持朝臣代を大江俊包、子部宿禰代を源澄伸、笠取直代を丹波頼亮がつとめ、車持朝臣は天皇の後ろ、子部宿禰が天皇の左側、笠取直が天皇の右側で奉仕していた。

【写真15 御蓋】



桜町天皇の大嘗祭（佐野）

【写真15】には朱書きで、「鳳 五色」・「蓋廻り鈴有」・「御蓋ハ菅ニテ五尺廻作之」とあり、鳳凰は五色で笠には鈴が廻らされていたことがわかる。

おわりに

以上、神道研究所の新収蔵資料である『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』の考証を試みた。その成立年代は不明であり、また元文三年（一七三八）の記録と異なる点や、後世の加筆であると思われる点も若干認められる。しかし、これらは資料の価値を否定するものではない。むしろ同資料には、秘儀に関する事項を「祕々」などと記載していることが特徴的である。そこには他の記録には見られない幣帛の存在があつたりするなど、これまでの記録を補うことができよう。

今後の大嘗祭研究に『元文聖代 大嘗会拝見私記 御調度品略図』が、活用されることを期待してやまない。本稿がその一助となれば幸いである。

注

- (1) 桜町天皇の御略歴については、『本朝皇胤紹運録』（『群書類従』第五輯所収）、『桜町天皇実録』一・二（ゆまに書房、平成十八年）を参照した。
- (2) 八束清貫「大嘗祭の御復興と皇室典範について」（『天皇・神道・憲法』所収、神社新報社、昭和二十九年）。
- (3) 武部敏夫「貞享度大嘗会の再興について」（岡田精司編『大嘗祭と新嘗』所収、学生社、昭和五十四年、初出は昭和二十九年）。
- (4) 三木正太郎「近世に於ける大嘗会」（『大嘗祭の研究』所収、皇學館大学出版部、昭和六十一年）。
- (5) 茂木貞純「大嘗祭再興史と祭祀研究」（『國學院雑誌』一〇七―十一、平成十八年）。
- (6) 武部敏夫「元文度大嘗会の再興について」（『大正大学大学院研究論集』十、昭和

六十一年)。

- (7) 福井款彦「丹波国山国元文三年「大嘗会木寄帳」について」(『神道史研究』三十四―三、昭和六十一年)。

- (8) 『八槐記』及び『種房卿記』の元文三年(一七三八)八月二十八日条参照。

- (9) 『八槐記』元文三年(一七三八)十月二十九日条に、「戊申。朝間雨灑。晚頭晴。酉刻許参内。今夜御禊也。依三省略^二無^三河原行幸^一。只如^レ形於^二清涼殿^一被^レ行^レ之。(後略)」とある。

- (10) 皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』(思文閣出版、平成二十四年) 参照。

- (11) 『公卿補任』元文三年(一七三八)条に、「八月廿八日大嘗会檢校。(中略)大嘗会国群卜定参仕。巳日節絵外弁。辰日節会外弁」とある。

- (12) 『荷田全書七』(名著普及会、平成二年)一二八頁。『大嘗会図式』には参列者の官職・氏名も記載され、より詳細な図である。

- (13) 『儀式』踐祚大嘗祭儀の訓読は、皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』(思文閣出版、平成二十四年)に従った。以下同じ。

- (14) 荷田在満の『大嘗会儀式具釈』(巻二)に「益親朝臣座を起ちて頼要が前に進み、贖物など凡三の土器を撤す。光知も清胤が前に進みて之を撤す。景春が前は兵右衛門、盛行が前は與^二左衛門^一之撤す。但此土器弁史の前にある間に、両弁史各贖物を撫で、散米を散き、解繩を口にて嚼解く等の態あり。今度も同じく然り。次第に載せざるは略なり」(『荷田全書七』(名著普及会、平成二年)とあり、「中臣祓」についての記述は見られない。「次第に載せざるは略なり」とあることから、省略されている可能性もある。

- (15) 伊藤聡「文明五年以前の吉田兼俱の斎場所―特にその創建時期を巡って―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊十七、哲学・史料編、平成四年)、同「吉田斎場所の由緒の偽作について」(『東洋哲学論叢』創刊号、平成四年)、同「唯一神道と吉田兼俱」(『国文学 解釈と鑑賞』七七五、平成七年)、岡田莊司「吉田兼俱と吉田神道・斎場所」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一五七、平成二十二年)などを参照。

- (16) 『公卿補任』元文三年(一七三八)条に、「権大納言 正三位 九条^(兼) 同^(兼) 植基^{十四}

三月七日叙^二從二位^一。七月五日兼右大将。(中略)大嘗会由奉幣上卿。辰日節会外弁。豊明節会外弁。」とある。

- (17) 『公卿補任』貞享四年(一六八七)条に、「右大臣 正二位 鷹司^(兼) 同^(兼) 兼熙^{九十}東宮傳。(中略)大嘗会由奉幣發遣上卿」とある。

- (18) 注(16) 参照。

- (19) 『公卿補任』寛延元年(一七四八)条に、「権大納言 正二位 大炊御門^(兼) 同^(兼) 經秀^{八十}右大将。(中略)大嘗会由奉幣上卿。辰日節会外弁」とある。

- (20) 『公卿補任』明和元年(一七六四)条に、「内大臣 正二位 九条^(兼) 同^(兼) 道前^{十九}左大将。(中略)大嘗会国郡卜定上卿。大嘗会由奉幣上卿。豊明内弁」とある。

- (21) 『公卿補任』明和八年(一七七二)条に、「内大臣 正二位 一条^(兼) 同^(兼) 輝良^{十六}左大将。(中略)大嘗会国郡卜定上卿。大嘗会由奉幣上卿。巳日節会内弁。豊明節会内弁」とある。

- (22) 『公卿補任』天明七年(一七八七)条に、「右大臣 從一位 近衛^(兼) 同^(兼) 經熙^{七十}五月廿日転。(中略)大嘗会由奉幣發遣日時并使定上卿。巳日節会内弁」とある。

- (23) 『公卿補任』文政元年(一八一八)条に、「内大臣 正二位 二条^(兼) 同^(兼) 斉信^{三十}左大将。(中略)大嘗会由奉幣發遣日時并使定上卿。豊明内弁」とある。

- (24) 『公卿補任』嘉永元年(一八四八)条に、「右大臣 從一位 近衛^(兼) 同^(兼) 忠熙^{四十}九月廿七日着陣(服後)。大嘗会由奉幣發遣日時并使定上卿。大嘗会前行。巳日節会内弁。臨時祭参仕」とある。

- (25) 『公卿補任』元文四年(一七三九)条に、「内大臣 正二位 九条^(兼) 同^(兼) 植基^{十五}右大将。二月三日任。(後略)」とある。

- (26) 皇學館大学神道研究所編『大嘗祭の研究』所収(皇學館大学出版部、昭和五十三年)。大嘗宮の概要は、皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』(思文閣出版、平成二十四年)を参照した。

- (27) 『百練抄』治承元年(一一七七)四月二十日条を参照。

- (28) 『兵範記』仁安三年(一一六三)十一月二十三日条を参照。

- (29) 皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』(思文閣出版、平成二十四年)の八四四頁に掲載。

- (30) 『大嘗会儀式具釈』(巻六)大嘗会卯日次第の在満説にも「天子より外の人此の薦

を踏まず。但閑白は御裾に候せらる、故、聊力之を踏まる」とある。

(32) 『訓読註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』四四六頁、四八四頁参照。

(33) 『訓読註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』七三〇頁、七四二頁参照。

(34) 鳥越憲三郎・有坂隆道・島田竜雄編『大嘗祭史料―鈴鹿家文書―』（柏書房、平成二年）では、「文書の年代は不明であるが、元文三年（一七三八）度の大嘗会の記録に、悠紀殿・主基殿は、昔は長さ四丈、広さ一丈六尺であったが、今度は禁庭せまき故、尺丈を減じたと見えるので、元文三年度のものかと思われる。しかし、それ以降のものであるかもしれない」とあり、本史料『大嘗会拝見私記』の扱う元文三年度（一七三八）の大嘗祭の関係史料である可能性を推測しているが、その後、に若松正志氏・加茂正典氏・岡田芳幸氏などによって再調査が行われ、当該の書付は年次不明で、それ以上の推測は難しいことが確認されている。科学研究費補助金研究成果報告書『近世吉田神社社家・鈴鹿家文書の調査と研究』（平成十八年三月、研究代表者若松正志氏）を参照。

(35) 真弓常忠「大嘗祭の祭神」（『日本古代祭祀の研究』所収、学生社、昭和五十三年）。

(36) 加茂正典「近年の日本古代即位儀礼研究の動向と課題」（『日本古代即位儀礼史の研究』所収、思文閣出版、平成十一年）。

(37) 真弓氏前掲論文、注（35）参照。

(38) 岡田莊司「『真床覆衾論』と寝座の意味」（『大嘗の祭り』所収、学生社、平成二年、初出は平成元年）。

(39) 川出清彦「大嘗祭における稲のお取扱について」（にひなめ研究会編『新嘗の研究 三』所収、協同出版、昭和四十二年）。

(40) 三品彰英「大嘗祭」（『古代祭祀と穀霊信仰 三品彰英論文集 第五卷』所収、平凡社、昭和四十八年）。

(41) 松前健「大嘗祭と記紀神話」（『古代伝承と宮廷祭祀』所収、塙書房、昭和四十九年）。

(42) 水林彪「記紀神話と王権の祭り」（『岩波書店、平成三年』）。

(43) 森田悌「嘗の祭りの祭神」（『天皇の祭り 村の祭り』所収、新人物往来社、平成六年）。

(44) 加茂正典氏は、『儀式』踐祚大嘗祭儀において大嘗宮正殿に「伊勢の浜荻」を素材として編まれた席である「伊勢の斑席」を、化粧内装表面に用いたのは、卯日の夜

と翌未明に、都から遠く離れた伊勢から来臨される天照大神（皇祖神）をお迎えするためであり、天照大神が大嘗祭の御祭神であることは、文献上、平安時代前期の『儀式』踐祚大嘗祭儀まで遡ることが確認できると述べる。加茂正典「大嘗祭御祭神考」（『文化学年報』六十五、平成二十八年）。

(45) 『大嘗会便蒙』の刊記には、「元文四年己未十二月吉日 江都書林 小川彦九郎梓行」とある。『大嘗会便蒙』出版に関する荷田在満へり処分等は、古相正美「荷田在満『大嘗会便蒙』御咎め一件」（『神道宗教』一四〇・一四一、平成二年）を参照。

(46) 鈴木敬三「有職故実図典―服装と故実―」（吉川弘文館、平成七年）参照。

(47) 『儀式』（巻二、踐祚大嘗祭儀 上）に、「九月の上旬に、神祇官、神服社の神主人を差して、神服の使と為、官に申して、駅鈴二口を賜ひ、参河の国に遣し、神戸を喚し集め、神服を織る長二人・織女六人・工手二人を卜定めよ」とある。

(48) 『訓読註釈 儀式 踐祚大嘗祭儀』三二〇以下を参照。

(49) 『儀式』（巻二、踐祚大嘗祭儀 上）に、「阿波の国の献るところの、鹿布・木綿は、神祇官に付けよ」とある。

(50) 龍眼木は榊の異名。『和名類聚抄』（巻十三、六丁ウ）に「龍眼木 楊氏漢語鈔云、龍眼木。（佐加岐。）今案龍眼者、其子名也。見『本草』日本紀私記云、坂樹。刺立為三祭神之本。今案本朝式用三賢木二字。漢語鈔榊字並未詳」とある。

(51) 加茂正典「神様に奉る御食事―鈴鹿家所蔵『大嘗祭神饌図』―」（『皇學館大学講演叢書』一六六、皇學館大学出版部）を参照。

(52) 加茂氏前掲論文、注（51）参照。

(53) 『桜町天皇実録』第一巻を参照。

(54) 『大嘗会儀式具釈』（巻七）に、「昔は豊樂院にて行はる。是天皇の宴会の所なればなり。今は豊樂院なきに依りて紫宸殿にて行はる、故、殿内殿庭の装束以下臣君の座、共に大に昔と同じからず」とある。

（さの まさと・皇學館大学研究開発推進センター助教）

Daijo-sai festival (a festival to celebrate the succession of
an emperor) of the 115th Emperor Sakuramachi
— Historical Investigation of “Genbun-seidai Daijoe-haiken-shiki”
(the Old book of which recorded the Daijo-sai festival) —

SANO Masato

At The Shinto Institute in Research and Development Center of Kogakkan University, advocated “a study of the religious service of the Imperial Family” and “a study of the religious service of Ise-jingu Grand Shrine” for a general study and, as an important issue since founded 1973, promoted “the study of the Harvest Festival after an Emperor’s enthronement” in particular.